

# アフリカの人々と名付け 17

## 詩としての名前と、諺としての名前

小馬 徹

### ガンダ人の「諺名」

ウガンダのガンダ人の間には、オートボルタのモシ人やケニアのキプシギス人の詩名に幾分似た名前がある。

ガンダ人は、15世紀頃にナイル語系の牛牧民がバントゥ語系の農耕民を支配して打ち立てたバガンダ王国の中核にいた人々である。バガンダ王国では、中央集権的な官僚機構が発達したが、1966年に滅んだ——そして、つい最近復興された。

ガンダの数多くの氏族は、それぞれ固有の人名を沢山もっている。これとは別に、氏族のいかにに関わりなく全ガンダ人が使う名前の一つに、ンシムビが「諺名」と呼ぶ名前がある。彼は、「ほとんどのバガンダの諺は、内に名前を宿している」と述べている[Nsimbi, N. B., “Baganda Traditional Personal Names”, *The Uganda Journal* 14(2), 1950]。

「諺名」は、諺の冒頭の語句に由来する。男性名の由来となった諺には、「小さな鳥は大きく見せるために多くの羽を着なければならぬ」、「すぐに過ぎ去ることのために泣いてはならない」などがある。一方、「妻が夫を軽んじ始める時には、妻が訪ねて住もうと思っている別の場所を既に見いだしているものだ」とか、「自分の支えである者よりも長生きすれば惨めであり、自分の支えである者をもつ者から物を乞う」のような諺から、女性の「諺名」が由来している[Nsimbi, *ibid.*]。

### ガンダ人の「詩名」

ンシムビは、「諺名」の他に、戦いで武勇を誇示する「ロマンティックな名前」があり、この種の男性名を71、女性名を17見つ

けたと言う。そして、「戦士は死を予想し、家に引き籠もる」、「家で死ぬくらいなら戦いで殺される方がまし」、「人々は銃に込められた火薬の爆発と閃光を恐れる」という3つの諺に由来する名前を引用している[Nsimbi, *ibid.*]。しかも、これらは、例外なくその冒頭の語句が名前となっていることがわかる。

すると、彼による「諺名」と「ロマンティックな名前」の区別は不鮮明になる。少なくとも名前の由来や構成法では両者に違いはないし、内容の差も諺のモチーフの僅かな差でしかない。ンシムビの言う「ロマンティックな名前」も、「諺名」に一括できよう。

### 諺名と詩名

本質的な問題は、「詩」としての名前と「諺」としての名前の違い、ひいては詩と諺の違いそのものを考える事である。

諺とは、古くから言い習わされた、教訓や風刺などの意味を込めた短い言葉である。ある諺研究家は、ジンバブウェのショナ人の諺、「諺を使う者は自らの望むものを得る」を引きつつ、諺の特質を次の3点に要約している。即ち、(1)定着した手短で技術的な形態、(2)社会における評価に関わる保守的な働き、(3)権威をもった効力 [Schipper, M., *Source of All Evil*, 1991]。すると、詩は(1)まずその一回性において、次いで(2)必ずしも教訓を含まず、(3)それを目指しもしない点において諺と異なっていると言えようか。

しかし、モシ人の詩名は一回性を目指しながらも、全て顕在的・潜在的な敵対者に向けられた箴言の冒頭句に由来している。それは、いわば脅しと共に相手に投げかけられる教訓

である。そして、箴言は定着すれば諺になるだろう。すると、「諺名」と「詩名」は同じものであるとも言えないだろうか。

### 詩か諺か

実は、私はこれまで上の点を必ずしも明らかにしなかった。連載第1回で、言葉の約束を踏み越えてでも、「今の私のこの胸の他ならぬ思い」を伝えようとするのが詩としての言葉であり、それは人間の名付けを超えた神の名付けであると述べた。そして、アフリカの名付けの魅力はそこにあるとも言った。

その一例として、ザイールのテンボ人の母親が、「もし夫がこんなにひどい人間だと知っていたら結婚しなかっただろうに」という思いをこめて子供に付ける「私は知らなかった」という名前を挙げた。だが、「私は知らなかった」ちゃんは、幾人もいるらしい。すると、この名のメッセージは詩ではなく、箴言または諺としての質をもつと言えそうだ。

生後間もない赤ん坊がすぐにも死ぬだろうことを表明する「除死名」にも、警句性がある。実は、ンシムビがガンダ人の純粋な渾名として挙げた2例、「骨身に染みる苦さ」と「死は誰にも哀れみを見せない」[Nsimbi, *ibid.*]も、「除死名」と考えるのが妥当である。ガンダには、他にも「死は残酷」、「死は誰も差別しない」などの「除死名」がある[Kewalyanga, F-X., *Traditional Religion, Custom and Christianity in East Africa*, 1976]。そうであれば、ガンダの名前のほとんどが諺の要素をもっていると言えよう。

### 真に詩たるディンカの「牛名」

「アフリカの個人名は、しばしば諺、 motto、歴史的事実への仄めかし、幸運な経験からでている」[Kewalyanga, *ibid.*]と言う——もっとも、最後の事例は稀だが。

ザイールのバントゥ語系農耕民モンゴ人は、

諺の応酬で挨拶する。一般に「バンツー系諸族では諺はよく発達している」が、「諺を知らなければレガ語は話せない」というレガ人ほどの「諺人間」ではない。レガの諺は仮面、彫刻、人名と深く関わっており、彼らの集会所の天井からは或る諺を象徴する品物を括りつけた一本の紐が下がっている。例えば、犬の歯の含意は、「犬の歯は白く輝いている。しかし、その歯はクソを食べる。つまり、人は見かけではわからない」[梶茂樹『アフリカをフィールドワークする』、1993]。

東アフリカ海岸部のスワヒリの人々も諺好きだ。女性は大風呂敷に似た、シュカと呼ぶ四角い腰布を様々に活用するが、その縁にも諸々の諺がプリントされている。

だが、全てのアフリカ人が諺好きなわけではない。リンハートは、南ナイジェリアのイグボ人のある種の名前が「教訓的、信心にかこつけた一般化、倫理的格言」という質をもつと言ひ、南スーダンの「ディンカでは、イグボの『世界は悪い所ならず』とか『神は個人の望みに縛られない』のごとき名前は思いもよらない」と述べた[Lienhardt, "Some African Personal Names, *JASO* 2, 1988]。

スーダンのディンカやヌエルの「牛名」、あるいはケニアのカレンジン諸民族の「詩名」や「牛名」は自らを誇る名前ではあっても、諺や警句、箴言という要素は少しもないし、潜在的な敵への威嚇を意図していない。それに付随する最大の要素は、多重な象徴性と謎解きなのである。

カレンジンの「詩名」と「牛名」は、多くの人々に分かち与えられる事で詩としての性格を弱められていた。一方、ディンカやヌエルの「牛名」は、極めて難解な謎解きを必要とする事が一因となって系譜的な記憶に残らないのだが、まさにその一回性によって最も詩的な名前となっていると言えるかも知れない。

(こんま とおる 神奈川大学社会人類学)